

国立民族学博物館研究報告別冊 no.022; まえがき

著者	中牧 弘允
雑誌名	国立民族学博物館研究報告別冊
巻	022
ページ	i-v
発行年	2001-08-31
その他のタイトル	Preface
URL	http://hdl.handle.net/10502/3689

まえがき

中 牧 弘 允

本書は「アートと民族文化の表象」をめぐる報告と討論の記録である。具体的事例としては国立民族学博物館の特別展「越境する民族文化——いきかう人びと、まじわる文化」をとりあげているが、民族文化におけるアートの出現、ならびにアートのもっている意味とその問題点をひろく議論の対象としている。これは一面では、近年人類学においてもさかんに論議されているオリエンタリズム批判にも通底するところの問題意識に根ざしている。とくに西洋美術の視点からアートと認定される作品やアーティストとよばれる作者をめぐる問題をくりかえし検討している。しかし同時に、アートと認知されるものを展示することの実際にたずさわった者との対話の回路も確保されている。展示批評を展示の担当者をまじえておこなうことは、これまであまりこころみられることはなかったし、活字になることも稀であった。すくなくとも、そのような意味では博物館にとって先端的な企画であったといえる。

この報告と討論は国立民族学博物館の重点研究プロジェクト「文化表象の博物館人類学的研究」のシンポジウム「アートと民族文化の表象——特別展『越境する民族文化』を中心に」（実行委員長 中牧弘允）として実現された（端 2000: 89）。シンポジウムは1999年9月9日から2000年1月11日まで開催された上記の特別展の会期中に開催された。期日は1999年12月15日（水）、16日（木）の両日であり、特別展の見学を含めて企画立案された。

特別展は「越境」をキーワードに世界はグローバル化・一体化すると同時に、多言語・多民族・多文化の共存にも向かいつつあることを示そうとするものであった。展示コーナーは1階に言語、音楽、地図、暦、インド映画が配され、2階では「主張する先住民文化」の共通テーマのもと「オーストラリア中央砂漠のアボリジナル」「極北のイヌイット」「アマゾンのシャーマニック・ヴィジョン」「カラハリ砂漠のアーティスト」の4つのコーナーがもうけられた（中牧編 1999）¹⁾。

本シンポジウムは特別展全体の展示評価ではなく、また2階展示のすべてを対象としたものでもない。焦点は2階展示を構成したアート——絵画、版画、彫刻、染織、音楽などである。まず展示担当者が展示の意図や問題点について報告するとともに、

カウンターパートの報告者をたて、展示資料あるいは関連地域のアートに関して別の角度から問題を展開してもらい、さらにコメンテーターには両者の報告を整理し、討論への架け橋を提供してもらうことを要請した。こうして実際の展示を見たうえで、ともすれば展示する側の一時的な発信になりがちな展示に批判的な検討を加え、その展示をめぐる議論を発展させようとしたのである。このことの意義は石毛直道館長の挨拶でも強調された。

問題提起では、実行委員長の筆者がシンポジウムの趣旨について、およそ以下のような内容を述べた。

特別展は民族文化のアートの展示それ自体を主眼としたものではないが、「越境する民族文化」というテーマに即して企画・構想した展示コーナーが結果としてアートに属するジャンルの展示をその一部としてとりあげることになった。アートのジャンルも絵画、彫刻、版画の造形美術だけでなく、染織や音楽や舞踊も含まれ、それぞれのコーナーの展示構想にふさわしいものとしてアートが選ばれている。アートを共通課題として展示しているわけではなく、いわゆるエスニック・アートとよばれるものが多く展示されていても、それはエスニック・アート展示を主眼としたものではない。各展示コーナーの担当者がトピックとしてとりあげてほしいことは、(1)民族文化を表象する際になぜアートを選んだか、(2)アートは民族文化の何を表象しているか、(3)アートが民族の範囲を越えて広まるとはどういうことか、(4)アートの展示に付随してどういう問題が生じたか、(5)アートによる民族文化の表象が来館者にどう伝わったか、などの問題である。これに対し、カウンターパートの報告者は、それぞれの立場や経験から、アボリジナル、イヌイット、アマゾン、サンのアートとその展示について、特別展にこだわらず議論を展開していただきたい。さらにコメンテーターには両者の報告をふまえて問題点を整理し、全体討論への架け橋の役割を果たすことが期待されている。このような組み合わせをとおして、特別展を中心としながらも、アートと民族文化の表象をめぐる幅広く議論を深めていきたい。なお、表象とは representation のことであって、心理学でつかわれるところの idea, Vorstellung ではない。後者では表象は外界の刺激がないにもかかわらず、大脳中枢の興奮だけによって引き起こされる像のことを指し、夢や幻覚はその典型とされる。

問題提起のあと参加者は展示場を見学し、午後からセッションがおこなわれた。セッションは展示コーナーに対応して4つも受けられ、最後に総合討論が加わった。シンポジウム全体のプログラムおよび参加者は次のとおりであった。

まえがき

プログラム日程表

12月15日

〈第1セッション〉「アボリジナル」

司会 久保正敏（国立民族学博物館）

発表 松山利夫（国立民族学博物館）

「オーストラリア中央砂漠のアクリル・ペインティング——展示における先住民文化の表象に関する事例——」

発表 田村加代（元フェリス女学院大学）

「オーストラリア絵画史の文脈における先住民アート」

コメンテーター 窪田幸子（広島大学）

〈第2セッション〉「イヌイット」

司会 近藤雅樹（国立民族学博物館）

発表 岸上伸啓（国立民族学博物館）

「エスニック・アートとイヌイット文化の表象——1999年度民博特別展示との関連で——」

発表 大村敬一（大阪大学）

「イヌイット・アートの創造力——『伝統』と『近代』の交差点としてのエスニック・イメージ」

コメンテーター 佐々木利和（東京国立博物館）

12月16日

〈第3セッション〉「アマゾン」

司会 藤井龍彦（国立民族学博物館）

発表 中牧弘允（国立民族学博物館）

「アマゾンのシャーマニック・ヴィジョンの表象とその越境」

発表 永武ひかる（写真家）

「アマゾンに関連するアート作品展示活動の報告」

コメンテーター 原 毅彦（立命館大学）

〈第4セッション〉「サン」

司会 西尾哲夫（国立民族学博物館）

発表 池谷和信（国立民族学博物館）

「サン・アートは、いかに生まれ、いかに展示されたのか？——1999年度民博
特展との関連から——」

発表 亀井哲也（野外民族博物館リトルワールド）

「Ndebele の装飾と博物館」

コメンテーター 川口幸也（世田谷美術館）

〈総合討論〉

司会 中牧弘允

前記以外の参加者

後小路雅弘（福岡アジア美術館）、吉田憲司（国立民族学博物館）

なお、民族表記についてひとつふれておきたい。というのは、オーストラリアの先住民についてアボリジナルとアボリジニが両方つかわれており、極北の先住民についてもイヌイットとイヌイトの二通りの表記があるからである。「アボリジニ」はこれまでの一般的な表記であるが、先住民はアボリジニという総称に抵抗を示すことが多く、最近ではアボリジナル・ピープル、あるいは個別的には彼らの集団名のあとにピープルをつけるのが一般的となっている。そこで総称として「アボリジナル」という形容詞を名詞的に使用するようになったという事情がある。他方、「イヌイット」はわが国で使用されている従来の一般的表記で、「イヌイト」は原語の発音により忠実な表記である。本書では双方ともあえて統一をはからず、使用者の選択にもとづいて併記することにした。

また、もうひとつ断っておきたいことは、討論のすべてが収録されているわけではないことである。編者の判断で適宜発言を削除したうえで、発言者に加筆修正を依頼し、さらに小見出しを付すなど、あらためて編集しなおしている。分量的には3分の2くらいに圧縮されている。

なお、本シンポジウムの内容については『民博通信』誌上で簡単な紹介をおこなっている（中牧 2000b）。また、特別展に関する総括でも多少ふれている（中牧 2000a）。あわせて参照していただければ幸いである。

最後に、シンポジウムの実施から本書の刊行にいたるまで、次のかたがたにはとくにお世話になった。実行委員の朝倉敏夫教授、重松真由美助手、ならびに事務局の和田真由子さんと東山由希子さん、そして編集室の山城寿賀子さんである。記して、あつく御礼をもうしあげる次第である。

注

- 1) 特別展の解説書第2部では「先住民の主張」というテーマのもとで各展示担当者がそれぞれのコーナー解説をおこなっているのですが、あわせて参照されたい。「世界のなかの聖地ウルル」(松山 1999), 「芸術にみる伝統と近代」(岸上 1999), 「アマゾンのシャーマニック・ヴィジョン」(中牧 1999), 「カラハリ砂漠のアーティスト」(池谷 1999)。

文 献

端 信行

2000 「重点研究プロジェクトの発足」『民博通信』88, 79-90。

池谷和信

1999 「カラハリ砂漠のアーティスト」中牧弘允編『越境する民族文化』pp. 50-55, 大阪：千里文化財団。

岸上伸啓

1999 「芸術にみる伝統と近代」中牧弘允編『越境する民族文化』pp. 42-46, 大阪：千里文化財団。

松山利夫

1999 「世界のなかの聖地ウルル」中牧弘允編『越境する民族文化』pp. 36-41, 大阪：千里文化財団。

中牧弘允

1999 「アマゾンのシャーマニック・ヴィジョン」中牧弘允編『越境する民族文化』pp. 47-49, 大阪：千里文化財団。

2000a 「特別展『越境する民族文化』をふりかえって」『民博通信』90, 43-65。

2000b 「アートと民族文化の表象——特別展『越境する民族文化』を中心に」『民博通信』90, 76-85。

中牧弘允編

1999 『越境する民族文化』大阪：千里文化財団。